東京妓情

醉多道士戲著

中

ヲ 6
4063
2

門 76
號 4063
卷 2

東京妓情卷之中

花柳御門　醉多道士戲著

○芳原

○歴史

芳原藝者の創まる何時乃頃あるを詳かにせざれども河東節乃書に藝者幇間の文字なく新内節に始めて有るを見るも百年以後のものと思はる維新以前も男女の別おそられ幇間と趣きを仝ふ〳〵唯遊客ゝ興を

○先欲說遊行

迎ふるに止まり猥褻は聞えも更にならざ
りき、殊さ本地も巫山情梦を以て本色さも
るが故に藝妓もあれどもなきが如くその
実娼流の婢女さ一般なりしが遷都以來恩
波彼が身も及び千歳舉らざる頭を擡げ藝
妓乃芳原にいるまでを知らずに至まり
是さ於てか堀山谷の藝者ハ頻りに冷を來
し爲めも本地に移住し自來稍娼流と並び
立つの地位さ昇まり然れども花柳城の習

○頻挫

ひ娼妓に對して寸歩を讓らざるを得ざる
を以て之さ遇まるを依然として下手に組
み花魁々々さの聲も其口さ絶えず蓋し娼
流ならずして已れあるの理さ由るあら
ん

○風俗

芳原藝者に二種あり一を懸板と称さ舊ハ
仲町の會所に名板を懸けて仲の町藝者を
表したるより然云ふなり此妓も仲の町乃

茶肆及び大中二樓さあらざるまで聘丹應ぜざるものに一をモグリと呼ぶ娼院の大小を論ぜず茶肆の優劣を問もば處嫌もびモグリ。歩くの謂ふ〳〵仲の町乃會所さ名板を懸けぞ且つ懸板藝者と交際せぞ故さ常さ彼れさ靡せらるを一歩を讓る然るども技藝さ至りてさ彼れさ超る万々実丹藝を賣る妓と云ふべし當時芳原の妓も錦帶を解て娼權を犯すことと嚴禁し若し之を犯

○與轉行孰與優劣

○潛歩妓之鼻將丈餘

せむ裸裎ふして仲の町を犬歩せしめ以て罰したるが明治四年解放後も終さその制破れ江戸藝者（芳原藝者他の妓を呼んで江戸藝者と云ふ）と同じく應來を專務とし甚だしきハ娼流の客に〳〵金ある者と見れば御膳を据えて之を奪ひ騙〳〵財を攫るより娼流と平地さ浪を起すあり恣と色とに敏捷ふる実さ芳原藝者を以て最一と称すべき故丹是故丹娼流と等〳〵浮薄ふして淫行あり

○花園曰捺斗大印保證之

○魔王曰新橋妓稍免引合

歌妓犯娼
權遭裸裎
犬歩罰圖

其粧ひ小至りてハ麗にしく粉厚く媚を賣り嬌を貢るに至りて〻亦東京妓中の稀れ〻見る所かり然まゝば旨く倡父を騙し巧みゝ未熟の蕩子を欺き情夫〻貢ぐの財を得るに妙ある是亦江戸藝者の上〻ハ望をいふべし然まゝも本地藝者の客に侍しく勤むるこゝも遠く江戸藝者乃及ぶ所〻ハらも余聘する毎〻之を賛め〻已まゞ此一事絶かゝ全面の醜を掩ふといふべし輓近

○中洲曰褒貶自在妓亦不能立腹

○醉翁曰雛妓の勢ひ頗る盛ふして蒼妓ハ爲めにその下風に立つに至り是れ客の雛妓を愛し雛妓も亦能く之に媚び嬌しく春を鬻げでなを人外天地〻生を遂ぐる者〻ハいへ實丹恩びざるハ芳原藝者ハして不実無情俠の何物〻るを知らゞ唯ゞ慾之れ事〻〻試ゞ丹問ふ冶客之と讀で尚その鼻乃下を長くするや否

○世人之鼻叢已延過矣再無可延謂

○酔翁曰所謂後世可怕者

三千紅粉競豪華遊冶此郷春不差別有絃

歌、嬌姉妹。海棠又欲靡櫻花。

○講武所在萬世橋外

○神田旅籠町ふ住む歌妓を称して講武所藝者と云ふ

○歴史

○花柳曰一個東京地誌

講武所ハ舊加賀原と称し廣袤数百歩、春日躑躅青の地ふしく傀儡師軒を列らね草屋を結び衆觀に供し殺風景の域ありしが今を去る二十二三年前幕府ふく嘗て水道橋内

○先呼來傀儡師欲傀儡視本地坡也

へ設立せし講武所を廣むるに方て、その接近の町家を没しまの地に換へ、與ふるに加賀原を以てせしより俚俗呼で講武所と称せり、その後此原に人形芝居結城座を再興しく觀ふそなへたるより世間奇を好むの慣ひしく頗る人意に投じ紅塵絶えざりしかど劇街の例忽ち一二乃藝妓を現ぜ観客が酒席に需めに應じたりしを講武所藝者の權輿とに而しく同芝居年を閲せば

○慨慨

○醉翁曰世間愛浩

人形夫如此甚矣

しく倒れたりと雖ども藝者も敢て業を失まじ終て居附となり殊て妓籍に入る者日日に増加し今は講武所藝妓の一職を立て萬世橋外に獨立し千歳の平康となれり嗚呼幕府治に居て乱を忘れざる講武所の名今空しく紅裙の肩書に残りその主は漠然として亡びぬ是れ他なし、壓制乃政度に因るのみ

○醒史曰訊諭刺衡當局者

○風俗本地の妓も何の目的なりしか成立しこの更らに考ふるに處なし唯目下主とする所は明神山上の開花樓及び雪月樓、その橋内外一二の酒樓に過ぎざれ而しかも之を飲むその判任相公華族の執事書生或は商估職人等ゆゑ大髯公文士の跡は甚だ稀なり故に其技や長ずるを須ひざるその喉や朗かなるに及ずば是を以て本地に姿色なるものなく技量なるものの乏しく只流れ渡りに御巻を

○魔王曰徐々御鉢廻執事書生來

○語曰過猶不及本地之諸姐善保守

濁る者と言もんか、それぞみや情を以て藉名ある妓も顕れぞ、侠を以て知られたる姉さんも出でぞ、又醜名を流傳する意氣筋のともからぞ蓋し本地一般の妓乃性質頴悟なるず特り姑息之安んぞるに原因する者あらん然きども氣淡くして意措く處かきも所謂神田兒の性質を備へて取るべき者あり但しその粉飾ふ至りても余も之を神田藝者とする能きば、問ふく阿卿も山の

○此是忠告

手かと言もぞんハあらば此の如き所以のものも其容多く田舎漢の野夫を敵手として数ぐあかもを以くかり神田乃姉さん夫れお氣が附かれやせん乎

香野香残野竟空。踏青人入綺羅叢。少年従是流文弱。講武名留歌舞中。

○天神在本郷區湯島

遥ろ小忍ケ岡公園の蒼翠を挹み近く小西湖の溶漾を臨み洛陽三月花弄もべく河朔

○説地之義則是惡

態之前置

の避暑興取べし中秋蟾娥仰で招ぐべく晩冬の銀界飲んで賞すべきハ湯嶋天神臺を措て夫れ何れの地ふか求めん此地舊東叡山直轄の處ふして妓流の棲所をるを許さず往時彼の變童あるもの聚落ふして僧侶乃菩提心ふ傷けたりしが安政年間より變童日ふその跡を藏くし之ふ代るに妓を以てせを想ふに當時茲ふ飲む者多くハ妓を数寄屋町より呼ひ揚げしふ故ふ意を妓ふ

○本地亦因此其尻軽

○前狼後尻多事哉也色界

置くに注ぎしもの歟自來妓籍增加し目今も三十名内外ふ在りて酒樓も天神境内ふ四五軒の多きを致せを。ても偖も色の世乃中ある哉

○慈王曰讀至此知時勢無愛憎

○風俗

上地も数寄屋町の上にありを雖ども地位も下ること数等齊しく清秀敷舒一泓澄碧を臨むを雖ども氣韻に乏しきふ亦数等是れ他あし本地の目的たる客も大学醫学

部の書生及び砲兵本廠の職人あり其氣を高尚にしその風を瀟洒にするも客の感ぜざるを奈何せん是を以て意氣下りて客と並立し遂に一般の風俗となりしからん故にその舉止陋にして見識てふものも曾てなく又伎を以て賣るものも本地三十の妓中僅かに一二の老妓を止まるのみ他も嬌て情を挑み或ひは豪飲して氣を鬪はし或ひも心ゆらむ落ちなん風情を見し一種別

○中洲曰氣下文字帶良味

○事情至是至美尽美

様の趣あり故丹渠を左右し之に遨遊して歡娛をつくすも頗る妙境なりと雖も東京妓を以て之に遇るも余が心を甘んぜざる所なりされむるそ匍出しの田舍漢も決して野夫を以て排擊せらるべ可なりと歡を與へて帰らしむ是れ業に怜悧ある欤將た客を見て逃がさぬ趣向か或ひは常に冷かるを丹據る欤恐くも此外丹出でざるん然れども本地の妓たる斯の如き陋ある丹も拘も

○魔王曰所以酔翁遊本地

○中洲日過賞々々

らば情を以て頭をたる阿國万吉旧名小若あを俠を以て出でたる玉吉等はり是れ何を原因とか然るこの想ふに高臺ふ獨立して見聞他ふ及むを所謂お坊さん成長を據るか或ひを流を渉の惡摺れあるを因りて欲此性幾かを此教坊の名を潔ふするに足る本地を遊ぶ通人試みふ渠等を向ひて騙術を行へを渠之を信じて疑をざるを恰も處女の如し

○信而行之勿食贅鉄砲

天神祠畔一望清。不忍池蓮上野櫻。爲此風光無限好。野梅郊柳亦多情。

○神明　在芝區

○神明町　○三嶋町ふ住をる歌妓を総称して神明藝者と云ふ

○歴史

神明の藝妓を楊弓店婦より變成したる者なり當時徳川さんの盛なる頃愛宕下を多く各藩邸の地ふして之ふ勤番をる武左無

○先説不風韻之由來

聊を慰むる爲め神明境内さ赴き水茶屋婦及び揚弓店婦に戯むれ時々携へて酒樓に登り歡を呼び興を引さしより何時とな旗亭の間に妓屋顕もれ以來歳月の久しさ

○夫又引合

一小聚落をかせり一新後関西の子弟東京城南に占居し爭ふて茲に飲みしより神明の風月頻かさ光色を増し遂さ純乎たる綺羅叢さいなきより

○風俗

○花柳曰見揚弓店婦之地金

本地の妓は武佐より成立ちたる所以にて

る故、竹芝の操乃色に似ず、西京流に脂濃く粲麗の風を重んず云へば淡泊せざる表飾なり、その心事も至りても情と意氣地も絶えて之を意に措かず只倉夫の嚢を狙ひ之を攫むさ汲々たり、之に加ふるさ芝魚肆の健兒さ相往來するを以て輕躁にして氣らく彼の所謂汚轉婆の風なるも東京綺羅の数部中に於て未だ見ざる所かり、想ふさ

○中洲曰　賛成々々

今一歩を進めて之を韻致を解せしめむ俠を以て任ずる者或る紅板の間に見んも未だ知るべからざ斯の如くかまを技の如きハ猫の皮を叩てそれかうけりの御粗末様と申そべ〜自餘ハ豈寫し出して反省を望むゑ遑らんや一切パア

濃粉煩脂售媚頻。神明祠畔薄情春。當年隘巷楊弓女。今日高樓歌舞人。

○深川在江左

○夢想華胥者

○仲町に住る歌妓を称して深川藝者と唱ふ

○歴史

古語に曰ふ騏麟も老ひぬれば駑馬ふ劣るとゝ、何ぞ艶史ゑ籍名ある深川の衰えく今日の衆掬に至ゑ四等に位るの歌舞場と変ぜ〜や余洛陽の半死白頭翁ゑ聞く往昔百年の前深川ハ岡場所を許さゝや娼院妓館櫛比鱗續楊州の秦淮ゑ物かゑ唐朝の教坊

も斯くほどだふも有るまじく殊ゆ芳原と
趣きを異ふ〳〵洒落の遊びを取らるを以て
粋人通客衣袂蹇然群を振つて相先ち繁華
實ゆ宇内に冠絶し通言羽織と称する歌妓
の如きも情濃かに意氣地深く誠ゆ江戸ッ
子を以て客ゆ接し人皆古今未曾有乃平康
と称せしゆ一たび他場所廃止の令出しよ
り土橋の雨に行吟俠の聲も跡絶へ送り迎
ひの枕紅院青樓も呂生の夢ゆ入り空し

○憾歎

く菜花舞蝶の荒甫となりて自來本地ゆ留
るものゝ各藩留守居會同の燕に侍し或も
通人ゆかき跡を弔ひて平清ゆ飲む等の招
きゆ應じ或も仮宅の設立ゆ臨みて幾かよ
炊煙を揚げたりしゆ一新以後仮宅も稀れ
々々となり加ふるに能く宴もる華も柳橋
若くハ新橋ゆて十分にして歩を深川ゆ進
むるものかきまり遂に今日の寂寥を來し
深川に妓ゆりと云ふ怪しむ程ゆ至れり風

月の澆季しいもん欤将さ開けて手早くか
りしが余白頭翁の語るを聞き情事ふ於て
歎息おき能もに噫
繁華百載夢茫然。幾有絃歌，認舊縁。仇姐米
娘何處弔。滿川風雨伴漁煙。

○風俗

○借來絶妙

當時羽織さ称し風流を江左ふ競ひ情を八
幡の鐘に詫ちたる彼の仇吉米八諸姐を六
道乃十字街の珠数屋町もへイ今晩と現

○請聽

もし今の姿を見せしめば将さ之を何とか
云もんエいぢれッていを言ひ續け癪を押
へる無理酒もその咽へも納まるもし侫し
有擊それ者の流れを受け微かながらも江
左ふ獨立し深川の肩書を負ひ殊ふハ有髯
の田舍漢に侍せば唯その地の材木商又も
温古の通客ふ接もるが故ふ因循にこそふ
も品高く可憐の風あり又もく客に接もる
の道を知わり只惜むらくハ熟閑の地よ出

○深川妓甘服馬

で〻他の藝者にもまれぞ之を以て時機ふ
後れ風俗に背き総て事かけたるやうに覚
ゆ杜牧の詩ふ曰く江東子弟多二才俊一。巻土重
來未可知と他年東京湾あるの時地勢の変
○眼斗大遷より〻舊蘇小を新柳の間に見る乃嬌
窩となるも未だ知るべからず

○神樂坂在二牛込門外一

○神樂町○肴町の歌妓を神樂坂藝者と
云ふ

○歴史

大鼓を叩き鈴を振り祝詞を朗とする神樂坂
豈ふ殺風景の歌妓あらんや而して之ぞ
是れ舊より有る處にして一新以後旗下
の邸を開いて市街をなせしより関西の健
○仮設勺法妙
児ぐ股間に猿田彦の面を挿み行吟歩き
を以て之を網せんとて天の宇須女の如き
婦を餌とし開設したる揚弓店の変成小係
もるものこと神明と一轍ふ出るを以て別

朝妝ニ
有訓
家
特倫天
陽氏

にハツの御耳を振り立て聞かしむべき事あしと畏みゝのみ白さ

○風俗

洛陽や廣し関東道ふしく三十里その洛陽城前を下町と唱へその後を山の手といふ而しく意氣風俗稍異あり妓に於けるも亦然り本地の藝者も陸軍武人或も鯰公の執事書生等乃田舎漢多きに居る故ふ意氣地立引きの習ひなく唯その首を白くしその

○仙史曰醉翁以官員為不粋一口罵去我未知其是非思非法主憎則及袈裟之謂否乎

尻を輕くし客をして沈湎泥の如くならしむるの術あれど妓の役を濟むを以て技藝の如きもペコレヤカと猾惚甚句を奏それで客意に投ず囃助の祝儀頂戴に至る故ふ勝ちと技に取らんとするそのを曾く見聞せざるなり然もだも若し神樂坂に藝者かくんむ余も断然山の手に歌妓あしと云もんのみ蓋し折りに姿色の取るべきその出づれでなを

神樂坂、遨妓弄、咽。牛籠門外客流、涎。休、道山園物華薄。野鶯亦自領、春妍。

○本石町

歴史

本地の妓の目的とするところの何たるを詳らかにせざると雖も小部落を為して永續する所を見るに又目的なしにあらざるべし想ふ遥かに日本橋北駿河町の妓と連絡を通じ本町及び石町邊より飲む客を目的とするもの多らん殊さ同所を大賈旅廛軒を列ぶる中に差錯あるを以てその主公或は主慣又は旅人に携へらるゝ四面に向ふの要路あれば之を以て安居するなる歟

○魔王曰讀歴史知其風俗

○醒史曰本地之妓多幸係醉翁之筆頭不被酷遇蓋由有旧縁八之故

風俗

温和を主とあれば大賈の間ふ交るを日本橋と神田の境にあるを以て流石ふ風致卑からざ然らも意氣爽かあり去り乍ら自然と良家阿娘の風を帶び萬事活達ならば通

乎呵々

人粹客をしく再顧乃念を生ぜしむるえの
も稀あり到底白門の間ふ立く姉姐と呼で
る者ハ本地より出ることあさと信じ
家傍商賈翠簾軽球燈標名尤有情。只慣平
生良家俗。吹弾亦帯處嬢聲。

○新富町 在築地

○新富町 ○木挽町ふ住そる歌妓を称し
て新富町藝者と云ふ

○歴史

○應來亦有定尺乎

新富町も新富部劇場の在る地にしく舊諸
藩の邸址なり妓乃有りしあを知らきしハ
劇場新設以來さしのへどもその実幕府時代
より已ふ木挽町舩宿の間に散處し武左の
聘ける所なり尋て島原の遊廓開院以來稍
人員を増し勢ひ將ふ一個の香苑たらんと
せしが同廓廃絶後寝衰しく跡を収めんと
するの状ありしも劇場成るを及びて死灰
再び燃へ自後娘。。。今日む。この聲ハ酒樓の

間に絶へざるに至れり

○風俗

西の方新橋を隔つ一帯水のみ而して其の位置の五等ふ在る者も何ぞや俚諺ふ所謂帯ふハ短かし綿襟ふも長きものに〳〵然る欤本地も劇を以て成り歌妓を以て立たむ妓も終うに落ちぶれの客を目的よりるのみその風俗も梨園弟子と相往來し猥褻乃中に日を送くるを以て自から軽騒浮薄に流れ意氣地及び風流情の如きハ之を阿岩稲荷に願ふて断ち、毛厘ばかるなし俳優ハ繾綣折ふ醜名を新聞紙ふ傳ふるものあるとも固より彼我ともに浮氣家業なれを敢て之を情事とも認め難く櫓下ふも通例ふて意氣筋とするに足らざるなり

○魔王曰讀而推其心事不衡愛想者其人必汚贈珍

○猿若町　在浅草

本地に妓ハ三劇場中村座市村座守田座遷移以

○醉翁曰猫従徘徊可若犬則喧嘩

來さて一新以後三座ともに田禄氏の爲ゝ
その大厦を奪ひ而〳〵各所へ轉座の後
も妓も與ゝ散乱せ〳〵の近年市村座再興以
來復ゝ移り來り微々と〳〵猫の皮を撲ち
のめせり風俗も新富町と大仝小異おれを
次へ銚子のお代り

從曽三劇轉場去無更多情訪越娘況又項
來祝融怒東風刼後懶新粧

○向島在墨水之滙

○須崎村に住むものを向嶋藝者と云ふ

○歴史

十里香雲三月の花萬頃の銀界冬日の雪画
舫朝に維ぎ玉鞍夕に去り以て情懐を遣る
も東京廣〳〵と雖も墨水に若くもなし是を
以て故土女の花に飲み騒客の月に醉ふも
の群り來り絶美を称し、旗亭之に由て開き
茶肆是に因て門帛を垂る花ゆり月あり酒
ゆり肴あり飲むものの妓を欲せざる能はず

○仙史曰同意々々

○不時字放眼視馬

然るに此地尤も輪蹄の劇しきを春日にあり故に妓も此候を卜し山谷及び廣小路より出張して不時の求めに應ぜしが一新以降情天色地の劇しに一層の劇を加へ風流汗流れ流るゝ尽きざるより遂に遷陀の下須崎村に巣穴を結び風來の沈酒氏を待つ〳〵

○風俗

夫れ寥廓悠長の處に解語の花之を市井紛

○中洲曰今夢香洲妓魁死

○花柳曰猫等座被袋引退

冗中の者に比べば幾何の閑雅温淑出塵乃趣きあるべきの理あり然るに本地の妓を姿色態度不言に花も若かざるのみならず平々凡々氣節なく韻致なく唯八百松及び植半主人の鼻息を窺ひ常に戰々競々としてその怒りを觸わんこと是れ恐る阿諛呰嘲此に仕ふること恰も家婢の如くに是れ他なし本地の旗亭にして妓の多く入込むは二家を重とするなり若し此二家の

怒りに激せず憫むべしその口乾上り喉を
鳴らすこと能たゞまつて然るなり抑も他
の綺羅襃落に入りて立職し技を賣るその
此乃如きみゝめか下よ安んじて平つく張。
らんや蓋しその姿色并びに技能皆他に向
ひて賣れざるが故に甘ゝく茲にお茶を濁
すのみ餘も推しく知るべきなり

○侑華鋒坂赤みゝめ

○赤坂

○田町に住る歌妓を称しく赤坂藝者

といふ

○歴史

赤坂も古くより嬌苑ありし地なりしくその
始めを知らゞ當時旗下の士及び雲州侯松
平氏の藩武左と目的とし煙を揚げ微々と
しく城西に割據せしが一新以後本地の四
面紫衣の人に居址とあり都珍らしく遊び
初めしより土着の妓のみあくハ敵をらく
るに足らゞ自後朝集暮散の烏合兵集り來

○一新恩澤

○醒史曰語險文妙

○賢張向之

○醉翁曰此等鈍刀不足傷余

り一綺羅城を築き之に據て肉壘を高くし溝を深くし薙刀を磨して陣を張るの紅禪隊とハなるべ

○風俗

試みに治郎に向ひて獨夫が不時の求めを待つ妓を何處ありやと問ふ必らず本地と答へん赤坂の應來を以て本來の面目とするそれ此の如し是れ他なし同地に遊ふ人も大抵鼎官以下ふして品位なる人ハ正治

○鼎官心事湛悶

○游客有等級妓巣豈莫等級

翁の外未ゞ聞あざ而しく鼎官の云ふ所ハ曰く我長官我相公常に新橋に非時の花を折り巫山に夢遊ふ我も人なり彼も人なり我しく往てその快味を試みんと然るに悲哉薄俸小祿一夕新橋に遊べば一月の給金夢と爲て散ぬ是に於て乎歩を赤坂に向けその速且つ廉なるを思ひを遣る是赤坂の應來に繁昌しく駄客の多き所以なり然ら妓にしく娼娼ふしく妓その俠と風致と

の如き何ぞ御尋ね申さに遑なくんや況し
て技能をや
偏地何言絶粉塵城西咫尺又為春野花必
竟任他折便是墻桃路柳人。
○廣小路　在浅草
○歴史
○醉翁曰有千手觀音之技量者甚稀
本地の妓も此邉の酒樓を目的とし〳〵成立
しをるかわむ古來より敢て冷熱あく偏へ
に觀音薩陀の利生に依頼し世の移り変り
に動かされぬ然れども土地に見込むべき
客なけれべ百度参りに逆せ蕩子も稀なる
處あり
○風俗
粉飾も浅草のいさく情を隅田川の淵より
深しと評し去れむ定めく姉妹達乃氣に入
る色けもども朝集暮散の客を以て三筋の
絲に世を渡るなれむ無味無香ふし〳〵遊客
とし〳〵再顧の念を懐かしめば然れども
○御門曰温柔鄉里香味有無余不保證之

そのの熱閙の地に往來しく万客に接する故か技量ハ遥こふ山の手藝者の上に出で且芳原てふ章臺に近きをいく風月の情も畧々解するものに似たり然し取り込みふ急なる性質有をいく往々人をして厭もむ

○妓亦以通一遍待

唯通り一遍の妓として之に遇さば左程御損もけうざるべし

綺羅紅粉亦爲叢。淺草寺邊西又東。日夜賽祈人不絶。妓家熱頼佛恩洪

○蒟蒻嶋在霊岸島

○冨島町に住む歌妓を称して蒟蒻島藝者と云ふ蒟蒻島ハその俚諺なり

○歴史

東京に嬌窩夥し冶客も亦頗る多しとあれ然もども君蒟蒻島に遊びしやと問ば十人皆未だしと答へん啻に然るのみならず本地に歌妓ありを訝かる程なり而して本地小妓ある近年のおとにならぶ幕府時代已

○醒史曰甚藁島得醉翁始頭些如罵詈辛棒可

にとれいりその已に久しく有て名の噪ぐざる所以の者も何ぞや妓奴一ベイ御迎ひ一アノ直つさヨ

○中洲曰醉翁探索至是服其子細

○風俗

本地も何の目的あり〻永續し粗末あごら也も妓街の体面をなす欤曰く小網町及び八町堀靈岸嶋の船問屋又も積問屋その他貨物乃諸問屋へ仕入れに來る地方の商人を馳走する爲め本地の妓を聘し〻興を助けしむるあと四季ともに間斷なし是れ本地の永續し〻一方に獨立ける所以なり夫れ地方の人も朝に來りて夕に去るそのあり何ぞ姿色を顧みるに遑なうん又焉ぞ情事に奔走するに遑なうんや故ふ本地の歌妓も滑稽洒落所謂芝居の半道に似たるそのにし〻多く姿色に乏し〻技量も亦人を感ぜしむるに足らぞその情事乃如きも嘗て之を知らざる者の如し然れども席ふ在く

○半道言半道化

興を助くるに至りてもその怜悧なるおとこ頗る取るべきものあり但しその人は嬌媚も蒟蒻島の名に因みて他所より甚ざしと世の好事家斯る妓にても一本食ふ氣なるや否や

嬌家叢在霊涯、隈一部、搦彈称善訣却恨蕭郎不長逗商船絶到估舟回

東京妓情巻之中畢

○醉翁曰軽蔑莨菪島勿附味噌